

養生訓(貝原益軒著)に示された医師  
になるために読むべき書について

(併せて現代の漢方医学教育について)

原 敬二郎

はじめに

医を志すものは早くから儒書を読みその力を以て医書を学ぶ

①よき師に従って十年間は黄帝内経、本草書を始め歴代の名医の書を読み医道に通じること

②その後また十年間病人に接し多くの病状を習熟し、先輩の名医の医術を悟り臨床医師として経験を重ねる

③これで始めて良医となり多くの人を救うことが出来る

④良医の読むべき書

黄帝内経、神農本草経、難経(扁鵲)、傷寒論、金匱要略(張仲景)、甲乙経(皇甫謐)、諸病源候論(巢元方)、千金要方(孫思邈)、外台秘要(王蕙)、衛生宝鑑(羅謙

甫)、三因方(陳無擇)、和劑局方證類(宋)、本草序例、小兒直訣(錢仲陽)、素問玄機原病式(劉完素)、丹溪心才(楊珂)、格致余論(朱丹溪)、脾胃論(李東垣)、蘇沈良方(蘇軾)、医書大全(熊宗立)、袖珍方(周意方)、立齋十六種(薛立齋)、万病回春(龔廷賢)、劉宗厚(医学折衷)、医学入門(李挺)、医学綱目(樓英)

ひるがえって漢方医学教育の現状をみると、全国の医学部学生教育で漢方医学を正式な教課程としてとりいれている大学は富山医科薬科大学を除いて皆無に近い。これで卒業生に漢方薬を使用することを無制限に許可すれば、西洋医学的な治療基準で漢方薬を使用することになり、昨年新聞紙上を騒がせた漢方薬小柴胡湯による副作用事件と同じ副作用をおこすことは当然の結果と云える。もし厚生省、根本的には政府、日本医師会などがWHOも推奨している民族の伝統医学の一環である日本における漢方医学を、国民に根づいた医学として守り育てることを認識すれば、この伝統医学を次代に受け継がせるべく努力する方針を確立することが必要であると思う。そのため当然大学医学部における教育に漢方医学を

とり入れ、正式教課程とし、かつ国家試験にも加えるべきであるし、また中国や韓国の現状のごとく漢方大学を現医療体系とは別に設立して純粹の漢方医を養成し、独自の国家試験を実施すべきであろう。民族伝統医学を無視する国家はいずれ滅亡すると云うことは歴史上からも証明されているし、現時点では教育に必要なスタッフも確保可能であり、漢方治療を希望する患者層も多く、日本東洋医学会と云うこれを支える組織も確立されている。欠けているのは政府の無策のみで、医師過剰時代を迎え民族伝統医学に配置転換すべき必要性をも考慮すべきではなからうか。

#### まとめ

まだまだ読むべき医書が多数記載されているが、現代の日本で漢方薬を使用する医師の中でこれだけの書を読破した医師が居るのだろうか。

益軒は養生訓の中で俗医は医学を嫌いてせず、唐土の書を読まず、病源と脈とを知らず、本草に通ぜず、薬性を知らず、医術にくらく、只近頃の日本にて作れる日本語の医書を二、三読み漢方の効能を少し覚え……貧民は

医なき故に死し、愚民は康医にあやまられて死ぬる者多し……と

養生訓を範とすれば漢方薬を用いる医師はひろく古今の医書も読破しなければならぬと云うことになる。

(福岡・医療法人恵光会原病院)